

台灣日本語文學報

32

【刊行の辞】

曾 秋桂 『台湾日本語文学報』32号刊行序文…………… 1

【特別寄稿】

小森陽一 『ノルウェイの森』における女性嫌悪(ミソジニー)…………… 3

【論 文】

- 曾 秋桂 『1Q84』における記憶再生の装置—漱石の『三四郎』を原型として— 21
- 葉 凌 村上春樹『アフターダーク』に描かれた暴力—鏡を読解の鍵として— 41
- 林 雪星 村上春樹作品における中国の記憶
—「中国行きのスロウ・ボート」『風の歌を聴け』を中心に— …… 67
- 小林由紀 温又柔『来福の家』における越境—作中人物の名前と言語の観点から— 93
- 黄 如萍 村上春樹「アイロンのある風景」論—摂取の関係を兼ねて— …… 117
- 沈 美雪 雑誌『台湾文芸』に関する—考察
—台湾俳句の発展に果たした役割を中心に— …… 139
- 王 嘉臨 志賀直哉「焚火」論—「皆」を視座として— …… 165
- 林 青樺 「スルコトガアル」の意味に関する—考察— …… 185
- 落合由治 村上春樹・短編作品の文章構成
—小説と随筆のマルチジャンル性の視点から— …… 209
- 陳 姿菁 表現力の向上を目指した「高級日本語会話」におけるTAE導入の可能性
—学習者のフィードバックから— …… 235
- 陳 淑瑩 日本統治下の台湾原住民初等教育における「修身科」の教科書にみる
家庭の扱い—昭和期を中心に— …… 261
- 李 宗禾 台湾人日本語学習者の作文学習動機づけにおける自己決定性の検討 287
- 林 長河 台湾における日本語専攻の大学院生のキャリア形成に関する調査… 313
- 黄 鈺涵 類義表現「(ノ)ダロウ(カ)」の語用論的分析
—台湾人日本語学習者の習得状況も含めて— …… 337
- 賴 鈺菁 吉田松陰の諫死精神—中国忠臣に対する評価をめぐって— …… 363
- 林 雅芬 書き言葉をどのようにして話し言葉に変換できるのか
—観光案内テキストのサイト・トランスレーションについて— …… 389

【活動彙報】

2012年7月～12月例会要旨および活動報告……………415

2012年12月
台灣日本語文學會

台灣日本語文學報

32

台灣日本語文學報32
台灣日本語文學會
2012年12月

2012年12月

台灣日本語文學會

志賀直哉「焚火」論 —以複數形人稱「皆」為視點—

王嘉臨

淡江大學日本語文學科助理教授

摘要

志賀直哉中期作品「焚火」，由於在作品中「皆」這個複數形人稱被使用高達 14 次之多，一直以來「皆」這個複數形人稱被視為解讀本作品的一大關鍵，廣為討論。然而「皆」這個複數形人稱並非只出現於「焚火」這個作品，由初期作品至後期作品皆可看到「皆」這個複數形人稱的使用用例。本論文目的在於透過志賀文學「皆」的問題體系的角度，重新檢討「焚火」中「皆」這個複數形人稱所代表的涵意；並進一步重新定位「焚火」這部作品。

考察結果得知：在初期作品「天津順吉」中複數形人稱象徵「感情連帶」，而這種「感情連帶」不同於「家族」、「血緣」情誼，而是由「伙伴」關係所組成的連帶情誼。而在「焚火」中則是描述出這樣的「感情連帶」是與血緣關係的情誼相近，這也正是此作品的特性。「焚火」中的這種轉變，不難想像是和實際生活中志賀與父親關係的轉化有極大關係。也就是說：早期由於實際生活中與家人的對立，因此志賀在作品中描述出脫離「血緣」，追求與「伙伴」所組成的「感情連帶」。然而隨著大正六年與父親的和解，轉而追求與血緣情誼相近的「感情連帶」。

綜上所述「焚火」這部作品不單只是大量使用「皆」這個複數形人稱，最重要的是它呈現出作者在「皆」等複數形人稱問題體系上所達到的新境界。

關鍵字：複數形人稱 「天津順吉」 感情連帶 皆

**The Research about “Takibi”by Shiga Naoya;
Focus on the plural form “minna”**

Wang, Chia-lin

Assistant Professor, TamKang University, Taiwan

Abstract

About “Takibi”(1920), because the plural form “minna” is used massively in the work, therefore the majority researchers thought this plural form “minna” is a big key point to understand this work, discusses widely. Nevertheless, "minna" the plural form asserts that not only appeared in "Takibi", from early works to later works can be seen the use case of this word. This thesis aims Shiga literature "minna" issue systems point of view, review "minna" meaning of the plural form asserts that represent and further relocating "Takibi". Investigate the result is: In early work “Otsu Junkichi”(1912) the plural form means “emotional solidarity”. This kind of “emotional solidarity” is different from ' the family ', ' blood relationship ', but similar to the partner's relation. However, in “Takibi” this kind of “emotional solidarity” is similar to blood relationship. This is a characteristic of this works too.

According to the argumentation above, “Takibi” not only use the plural form in a large amount, the most important thing is it demonstrates the new realm that the author reaches on this question system.

Keyword: Plural form, “Otsu Junkichi”, emotional solidarity, minna

志賀直哉「焚火」論 —「皆」を視座として—

王嘉臨

淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

志賀直哉の「焚火」について、作品中「皆」という人称が十四回も使用されていることから、従来「皆」という人称の内実について注目され、論じられてきた。しかし、「皆」という人称は「焚火」にのみ見出されるものではなく、初期作品から後期作品に至るまで興味深い例をいくつも見ることができる。本論の目的は志賀文学における「皆」の問題の広がりの中で「皆」という人称について再検討し、このテキストの位相を問うことにある。

考察の結果、「大津順吉」と「焚火」では「皆」・「吾々」・「私共」という複数形人称は単に複数形を表すのではなく、精神の連帯を表していることが明らかになった。そして、こうした精神の連帯は初期の「大津順吉」では、「家族」、「血縁」とは異なるもので、「仲間」という理解と信頼の心情的、精神的な結びつきとして呈示され、それに対して、「焚火」では母子の通じ合いという血縁的結合の世界に近似するものとして呈示されている。

こうした精神の連帯をめぐる差異は大正六年の志賀と父の和解に関係すると考えられる。よって、初期から中期にかけて繰り返し問い直されている志賀テキストにおける「皆」・「吾々」・「私共」という複数形人称の問題系が、「焚火」において一つの到達した境地を示したと言えよう。

キーワード：複数形人称 「大津順吉」 精神の連帯 皆

志賀直哉「焚火」論 —「皆」を視座として—

王嘉臨

淡江大学日本語文学科助理教授

1. はじめに

「焚火」は最初「山の生活にて」として『改造』（大正九・四）に発表され、翌年単行本『荒絹』（大正一〇・二、春陽堂）に所収された。大正十一年『寿々』（大正一一・四、改造社）に収録する際に「焚火」と改題された。

「焚火」について、芥川龍之介は、「東洋的伝統に立つ美しさ。この点は存外等閑視されてゐる。殊に志賀氏のエピソードは全然この点に無理解である。『焚火』『雪の日』等に徴すべし」¹と評価している。こうした芥川の「焚火」に対する〈東洋的〉といった同時代の心境小説的な読みは、現在まで続いている²。

他方、小林幸夫は作品の内部に注目し、作品の主題を解明した。小林は作品中に頻繁に現れる「皆」という人称を指摘し³、「個として区切られた人間—他者との交感を希求し、共生を生きようとする意志、これを「自分」の使用する「皆」という語の内実と考えることができる。この男は、自然に包まれつつも自然と対峙するのではなく、それを恰好の舞台として、同一の時間、同一の空間で、同一の心位を共有することに、自己の至福を感じていたのである」⁴と「皆」という場の内実を述べ、また作品の後半におけるKの逸脱から、「自分」の抱く「皆」意識は、ついに脆弱な幻想にすぎなかつ

¹ 芥川龍之介「[文芸的な、余りに文芸的な]補輯」『芥川龍之介全集第9巻』P268

² 例えば、大津山国夫(1988)は「『焚火』が志賀の心境小説の代表作であることに異論をはさむ人はあるまい」と評した。

³ 小林幸夫(2004・初1988)「「焚火」—〈皆〉という幻想」『認知への想像力・志賀直哉論』双文社 P152~166

⁴ 同前掲小林幸夫書 P155~156

た」⁵と結論づけた。また、長沼光彦は「空間」の視点から、「〈皆〉という場に「零点」を重ね合わせて来た読者は、会話が主体となった時に、やはりその会話の座の中に「零点」を置き、登場人物たちの会話に耳を傾ける。〈Kさん〉の個別的な体験も、他の人物とのそれまでの一体化した雰囲気の中で共に聞き、何らかの形で享受する心構えができていよう。この作品がそれまでに〈皆〉に帰する空間を生成してきたのは、そのような聞き手を作ることを期待したのである。そのような聞き手を作り上げる、場あるいは座の雰囲気といったものが、これまで述べてきた、この作品の空間の性質なのだ」⁶と小林と異なる立場から「皆」の内実を明らかにした。近年では、下岡友加は「人間と人間、自己と他者の心理の隔絶、分りあえなさを描き、主たるテーマとしてきた日本近代文学にあって、「焚火」はその真逆の世界（ユートピア）を提示する。〈皆〉という共感体を描き、さらには彼らを見守る、より大きな存在である自然と宇宙の広がりまでを、観念の言葉ではなく、どこまでも目前に展開した現象として描き出す。人間・自然・宇宙の連環—これが「焚火」の表現が実現した究極の表象世界」⁷と述べ、「皆」の性質とその文芸的意義を深く掘り下げている。

たしかにこの作品における「皆」の内実を考える時、それらの見解は有効だと言ってよいだろう。しかし、このような「皆」という人稱は「焚火」にのみ見出されるものではなく、初期作品から、後期作品に至るまで、興味深い例をいくつも見る事ができる。ゆえに、本論の目的は初期作品から連続する脈絡を視野に入れて「焚火」における「皆」の内実について再検討することにある。以下、まず作品の細部にわたって分析を進めたい。

⁵ 同前掲小林幸夫書 P164

⁶ 長沼光彦(1995)「「焚火」の空間」『都大論究』P41

⁷ 下岡友加(2011)「人間・自然・宇宙の連環—志賀直哉「焚火」の表現世界—」『県立広島大学人間文化学部国際文化学科紀要』P212

2. 語りのあり方について

まず、「焚火」の冒頭部分に注目しよう。

其日は朝から雨だった。午からずつと二階の自分の部屋で妻も一緒に、画家の S さん、宿の主の K さん達とトランプをして遊んでゐた。部屋の中には煙草の煙が籠つて、皆も少し疲れて来た。(P101)

「焚火」では、一人称の語り手「自分」が、「妻」や「画家の S さん」、「宿の主の K さん」といった登場人物と舟遊びをしたり、焚火をしたりするなどの交流が描かれている。そして、志賀のほかの一人称小説のように一人称の語り手が物語を通して自分自身に言及する形式と違い、「皆も少し疲れて来た」とあるように語り手「自分」が「皆」に焦点化している。それがこの語り手の基本姿勢である。このような語りのあり方は、次の場面にも見出せる。

夜鷹が堅い木を打ち合すやうな烈しい響をたてて鳴き始めた。暗くなったので仕事を切り上げた。春さんは掌で雁首の煙草をつめ更へながら、

「牛や馬が登つて来たから、早く柵を拵へないといけないね」と云つた。

「さうですね。作りかけを食べられちやあ、気が利きませんからね」と K さんが答へた。家を食はれると云ふので笑つた。此山には壁土になる泥がないので宿屋でも壁の所は総て板張りにしてある。此小屋では其処を炭俵と同じ質の大きいものを作らせて、それを二夕重にして其間に蓆を入れた。

「牛や馬には此家は御馳走だからね」と春さんは笑ひもせず云つた。皆は笑つた。

山の上の夕暮は何時も気持がよかつた。殊に雨あがりの夕暮

は格別だった。其上、働いて其日の仕事を眺めながら一服やつて居る時には、誰の胸にも淡く喜びが通ひ合って、皆快活な気分になった。 (P102~103)

「自分」と妻が近々移り住むために、Kさんと炭焼きの春さんが掘立小屋を作ってくれた場面である。語られる個々の出来事に言及し自分自身を位置づけるのではなく、「皆は笑った。」「皆快活な気分になった。」という表現から、「皆」に視点を置き、意味づけを行っている語りのあり方が読み取れよう。こうした「皆」に視角を置き、意味づける語りは、作品の後半においても引き継がれ、強固なものとなっていく。まず作品の後半における以下の記述を引用したい。

「不思議なんて大概そんなものだね」とSさんが云った。

「でも不思議は矢張りあるやうに思ひますわ」と妻は云った。

「さう云ふ不思議はどうか知らないけど、夢のお告げとかさう云ふ事はあるやうに思ひますわ」

「それは又別ですね」とSさんも云った。そして急に憶ひ出したやうに、「そら、Kさん、去年君が雪で困った時の話なんか、左う云う不思議だね。未だ聴きませんか？」と自分の方を顧みた。(P111)

「夢のお告げとかさう云ふ事はあるやうに思ひますわ」という妻の発言に触発され、SさんはKさんに去年雪山で遭難しかけた時の不思議な話を促す。作品の後半に挿入されたこのKさんの話について、小林幸夫は「「自分」は、選択と排除の上に四人だけで成り立つ「皆」意識に執拗にこだわり、その共生感を、その心情の相互浸透を生きてきた。しかし、Kのエピソード=事件はその「皆」意識に大きな罅を入れた」⁸と述べ、このKさんの体験談がもたらした分裂

⁸ 同前掲小林幸夫書 P162

について論じた。

ここで前述した語りのあり方を踏まえ、Kさんの体験談がどのように位置づけられるのか考察していきたい。

「私が其日帰る事は知らしても何にもなかつたんです。後で聴くと、お母さんがみいちゃん（Kさんの上の子供）を抱いて寝て居ると、一別に眠って居たやうでもないんですが、不意にUさんを起して、Kが帰って来たから迎ひに行つて下さいと云つたんださうです。Kが呼んでゐるからつて云ふんださうです。あんまり明瞭して居るんで、Uさんも不思議とも思はず、人夫を起して支度させて出て来たと言ふんですが、よく聴いて見ると、それが丁度私が一番弱つて、気持が少しぼんやりして来た時なんです。山では早く寝ますからね、七時か八時に寝て、丁度皆ぐつぐつと寝込んだ時なんです。それを四人も起して、出して寄越すんですから、お母さんののは余程明瞭聴いたに違ひないのです」

「Kさんは呼んだの？」と妻が訊いた。

「いいえ。峠の向うちやあ、幾ら呼んだつて聴えませんもの」

「さうね」と妻は云つた。妻は涙ぐんで居た。(P114)

Kさんがその日に帰ることを知らず、またKさんが声を出していないにもかかわらず、雪山で遭難しかけた時、母はKさんの声をはっきり聞いたというKさんと母の心の通じ合い、親密さは妻に強い感動を与え、「涙ぐ」ませさせた。そもそも、「私は、誰にもうかがい知ることのできない「奥の院」とでもいうべき内面世界を持っている。この内面世界において、私だけに知られる喜怒哀楽が去来し、欲望や願望、意志や決断、等々が生じる。この内面世界こそが、私自身に行動を発動させるところであり、私自身の中心と言ってよ

いところである⁹」とあるように、感情、内面世界は一人ひとりが個別的なものとして存在している。しかしKさんの体験談を聞き終えた後、妻が「涙ぐんで居た」という身体的反応を見せるように、強い感動を受けていることから、感情の個別性を超え、Kと母の心の通い合いは共感を引き起こしているといえよう。そして、こうした共感が「自分」にも見出せる。

Kさんとお母さんの関係を知つてみると此話は一層感じが深かった。よくは知らないが、似てゐるので皆がイプセンと呼んでゐたKさんの亡くなつたお父さんは別に悪い人ではないらしかったが、少なくとも良人としては一余りよくなかつた。平常は前橋邊に若い妾と住んでゐて、夏になるとそれを連れて山へ来て、山での収入を取り上げて行つたさうだ。Kさんはお父さんのさういふやり方に心から不快を感じて、よく衝突をしたといふ事だ。そしてこんな事がKさんを一層お母さん想ひにし、お母さんを一層Kさん想ひにさせたのだ。(P114～115)

「Kさんはお父さんのさういふやり方に心から不快を感じて、よく衝突をしたといふ事だ。そしてこんな事がKさんを一層お母さん想ひにし、お母さんを一層Kさん想ひにさせたのだ。」とあるように、「お父さん」といった他の家族と区別された「お母さん」との関係性は緊密で特別な意味を帯びている。そしてKさんと妻の会話に続くこの「自分」の付言は、Kさんと母との心情的な繋がり2012年12月の深さを示している。Kさんと母の親密さを述べるこの「自分」の付言は、雪山で死の危機に直面したKさんを救つたKさんと母の心の通い合いというKの物語を否定するのではなく、全面的に受け入れたものである。よつてこの「自分」の付言は、「自分」とKさんとの間の認

⁹ 梶田叡一(1998)『自己意識の心理学』P8

識のずれを露呈するものである¹⁰というよりは、むしろ K さんの物語をより強固なものにするものだと言えることができよう。その意味で、小林が述べるような、K と母親のエピソードによる「皆」の「罅」といった議論には留保が必要だろう。K の不思議の物語が個人的体験という単純な理解に収束せず、同性か異性か、あるいは血縁か非血縁かなど様々な異質性を超え、「自分」や妻に共感させ、「皆」の連帯を発生させた。つまり、K さんのエピソードは K さんの物語といった新しい物語を生み出すのではなく、周囲の世界に収束し、意味づけるものとなる。よって、作品の後半に挿入されたこの K さんの体験談はそれまでの物語の流れとの間に分裂・逸脱を生じず、「皆」に視角を置き、意味づける語りに収束し、相互に支え合うと言えよう。

3. 「皆」という人称

それでは物語の焦点となる「皆」がどんな内実を帯びているのか、以下見ていきたい。

「皆」という人称の内実について、小林幸夫は「「自分」の「皆」意識の中には最初から無意識の排除があって、炭焼きの春さんは入っていない。「市や」という「低能な男の児」も、「自分」たちの生活に関わっていながら入っていない。「自分」・妻・S・Kのみが「皆」であって、あとの人々は、K さんの母も U も氷切りの人夫も、「お札を売る人」も全員入らないのである。つまり、「皆」とは、トランプ遊びを共にし、舟遊びを共にする、「自分」夫婦をめぐる友人共同体なのである¹¹と指摘している。しかし、志賀の初期作品から後期作品に至るまで実に広範にモチーフとされている「皆」という人称は単に小林氏が指摘した「友人共同体」に止まるだろうか。

¹⁰ 前掲小林幸夫書 P161 では、この「自分」の付言を「このような「自分」の不思議に対する認知、認識のあり方は、K の母や U と明らかに対峙し、K との間にも大きく一線を画すことになる」としている。

¹¹ 同前掲小林幸夫書 P157

まず、従来の研究でもたびたび問題とされるように重要な要素を含む Kさんと炭焼きの春さんが掘立小屋を作ってくれた場面を再度引用しよう。

山の上の夕暮は何時も気持がよかつた。殊に雨あがりの夕暮は格別だつた。其上、働いて其日の仕事を眺めながら一服やつて居る時には、誰の胸にも淡く喜びが通ひ合つて、皆快活な気分になつた。(P103)

山の上の夕暮れ、雨上がりの夕暮れのなかで、「働いて其日の仕事を眺めながら一服やつて居る時には、誰の胸にも淡く喜びが通ひ合つて、皆快活な気分になつた。」とある互いの感情交感が描かれている。ここで言葉など何の媒介も経ずに、心と心が触れ合うといった関係が、「皆」という言葉から読み取れる。そして、こうした「皆」という連帯の緊密な一体感はさらに行動の一致によって確認できる。

Kさんは其邊に落ち散つてゐる枝を火に積み上げながら、

「仕舞に消えますからね。寝込んで了ふと、明方は随分寒いでせうよ」といつた。

「こんな側で焚いても窒息しませんの？」

「中で焚かなければ大丈夫です。それより竈が余り古くなるとひとりでに崩れることがあるんですよ。殊に雨のあとは危いんですよ」

「可恐いわ。Kさん教へてやる方がいいね」と Sさんも云つた。

「わざわざ教へなくても」と Kさんは笑ひ出した。「これだけ大きな声で話して居ればみんな聴えてゐますよ」

竈の中で又ゴソ < と枯葉の音を立てた。皆は一緒に笑ひ出した。(P106)

本来「私は、結局のところ自分の意志と決断によって行為し、自分自身のあり方を統制している」¹²とあるように、行動はそれぞれ別個の人格を担い手とし、共有することはできない。古い炭焼き窯の中で野宿をしている蕨取りに古い窯が崩れる危険のあることを教えた方がいいという妻の発言に対して、Kさんが「これだけ大きな声で話して居ればみんな聴えてゐますよ」と答えた。そして、あたかもKさんの言葉に答えるかのように、窯の中で「ゴソくと枯葉の音を立て」、「皆は一緒に笑ひ出した」。意識せずしたこのような行動の一致、默契は、気持ちがぴったり合っていることの現れと理解できよう。

そして、この作品においてさらにKさんと母という血縁の枠組みと対照することで、何の媒介も経ずに気持ちがぴったりする默契、「皆」という連帯の強固さが呈示されている。

「Kさんは呼んだの？」と妻が訊いた。

「いいえ。峠の向うちやあ、幾ら呼んだつて聴えませんもの」

「さうね」と妻は云った。妻は涙ぐんで居た。

「そんな気がした位では却々、夜中に皆を起して、腰の上まで埋まる雪の中を出してやれるものではないんです。それは巻脚絆の巻き方が一つ悪くても、一度解けたら、凍つて棒になつて了ひますから、逆も、もう巻けないんです。だから支度が随分厄介なんです。支度にどうしても二十分やそこらかかるんですよ。其間お母さんは、ちつとも疑はずにおむすびを作つたり、火を焚きつけたりして居たんです」(P114)

Kがその日帰ることを誰も知らなかったのに、それにKが声を出していないにもかかわらず、Kのお母さんはKが夜中の雪山で遭難

¹² 同前掲梶田叡一書 P8

しかけた危ない時、Kが呼んでいるからと言って、Kを迎えに人を行かせ、死の危機に直面したKさんを救った。ここで何の媒介も経ずに心と心が通じ合う母子の緊密な一体感が描かれる。そして前述した「一人が起つて窓の障子を開けると、雨は何時かあがって、新緑の香を含んだ気持のいい山の冷々した空気が流れ込んで来た。煙草の煙が立ち迷つてゐる。皆は生き返つたやうに互に顔を見交した。」

(P101)、「其上、働いて其日の仕事を眺めながら一服やつて居る時には、誰の胸にも淡く喜びが通ひ合つて、皆快活な気分になつた。」

(P103)とあるように、黙っていても、気持ちがびったりする黙契、「皆」という連帯は、母子の通じ合いに近似するものと言えよう。

「焚火」において、作中で語り出されるKの体験談と対照することで、言葉等の媒介を使わずに、気持ちがびったりする黙契、「皆」という連帯は、母子の通じ合い、血縁的結合に近似するものとして呈示されている。よって小林幸夫が指摘した「友人共同体」の読みは、こうした様々な文脈に跨って言及されてきた「皆」のモチーフを捉えきることができないと指摘できる。

4. おわりに

前述したように、「皆」という人称は「焚火」にのみ見出されるものではなく、初期作品から後期作品に至るまで、興味深い例をいくつも見る事が出来る。筆者はかつて、志賀初期の代表作として知られる「大津順吉」(大正元年・九、『中央公論』)における「皆」/「吾々」/「私共」といった複数形人称に注目し、論じた事があるが¹³、志賀の「皆」/「吾々」/「私共」といった複数形人称はいずれも精神の連帯を示し、重要な意味を含んでいる。そして、「焚火」と初期の「大津順吉」と比べた時、「焚火」では「皆」という複数形人称が「家族」・「血縁」と結びつけて用いられるという使い方の違い

¹³ 王嘉臨(2008)「志賀直哉『大津順吉』論—〈アイデンティティ〉の視点から」日本文芸研究会第60回研究発表大会発表

が読み取れる。以下、「大津順吉」における複数形の人称を見てみよう。

「大津順吉」は第一部と第二部から成り立っている。第一部では、主人公順吉のキリスト教との関係、キリスト教の教えと性欲との拮抗が描かれている。第二部では、女中千代との恋愛事件が扱われている。ここで注目したいのは、作品の後半において順吉と家族、そして仲間との関係が示される際に、「皆」、「吾々」などの複数形人称が用いられているという点である。

やや長いが、以下その場면을引用しよう。

実際、これらの人々には私は変則な発育をとげた子供以上には見えなかつたかも知れない。皆は私共のいふ事がいつまでたつても価値のない空想であつてそれが実際の人生では仕舞迄何の役にも立たぬものと決め込まずにはゐられなかつたであらう。私共は絶えず、何かしら自惚れ強い事を云はずにはゐられなかつた。然し仕事に対するその烈しい野心と、実際持ち得る自信とは何所か不均衡な所のあるのは自分でも感じてゐたのである。いひかへれば其時の現在に於いては多少なり自信を持ち得るやうな仕事が出来なかつた、その事が何となく私共の自惚れをいふのに幅のない声きり出させなかつたのである。如何にも甲ン走つた声であつた。而して此キイ < 声でいふ自惚れは実際その仲間以外には通用しなかつた。私が痴情に狂つた猪武者であるやうに仲間以外の人には私共は皆何かに狂つてゐる猪武者に過ぎなかつたのであらう。然し其所で吾々も止つてはゐられなかつた。而して其止ることなき若者についてそれから先を考へやうと全くしなかつたのが、それ等の人々が私共との関係で彼等自身を或る意味で不幸にした一つの原因なのだと思ふ。これは然し殆ど避けられない事とも思ふ。(P314～315)

表現こそ違いが¹⁴、引用文の中で「皆」・「これらの人々」/「私共」・「吾々」・「仲間」といった対比を通し、「私共」「吾々」のあり方が説明され、その価値が強調されている。千代が連れ去られ、祖母や母等に裏切られ、そして父に面談を断られたという引用文直前の一連の出来事から、順吉の怒りの直接原因は千代との結婚問題をめぐる家族の対応ぶりであると分かる。よって、引用文における「私は変則な発育をとげた子供以上には見えなかつた」、「私共のいふ事がいつまでたつても価値のない空想であつてそれが実際の人生では仕舞迄何の役にも立たぬものと決め込まずにはゐられなかつた」とする「皆」・「これらの人々」は家族であると理解できる。

家族という親しい間柄であるにも関わらず、家族は順吉を「痴情に狂つた猪武者」とみなしている。家族の無理解に対して、「その仲間以外には通用しなかつた」という理解と信頼の心情的、精神的な結びつきで結ばれた「私共」・「吾々」・「仲間」という間柄が呈示されている。つまり、「家族」、「血縁」という社会規範、外部からあてがわれた枠組みの外側である。

以上のように、「家族」、「血縁」と異なるもので、「仲間」という理解と信頼の心情的、精神的な連帯が、「吾々」・「私共」と表記される複数形人称に示されているのである。このような「大津順吉」における「吾々」・「私共」という複数形人称のあり方は、中期の「焚火」の位置づけを考察する時、すぐれて示唆的である。

「大津順吉」において「吾々」・「私共」という精神の連帯は「家族」、「血縁」と異なるもので、「仲間」という理解と信頼の心情的、精神的な結びつきとして呈示されている。それに対して、「焚火」では「皆」という精神の連帯は、母子の通じ合いという血縁的結合の世界に近似するものとして呈示されている。このような精神の連帯をめぐる差異は大正六年の志賀と父の和解に関係すると考えられる。

¹⁴ 「大津順吉」では「吾々」・「私共」の表現が使われ、一方「焚火」では「皆」という表現が使用されている。

以下、父と和解する過程を描いた「和解」（大正六・一〇『黒潮』）の一節を引こう。

昼飯の時父は酒を飲んだ。母も叔父も自分も妹達も皆一つつつ飲んだ。飲めない者は真似だけした。

何の為にさういふ事をするのかさういふ事をするのか誰も口に出すものはなかつた。皆には只其胸に通ひ合ふ和らいだ嬉しい感情があるだけで誰もそれを口には出せなかつた。それは気持のいい事だつた。吾々は只雑談をした。それでも父は想ひ出して、

「お浩。英子の所へ今日の事を電報で云つてやれ」と云つた。
(P406～407)

父との和解を実現した直後の場面である。興味深いのは、「皆」・「吾々」という複数形人称、連帯が「家族」と結びつけて、描かれている点である。ここに、初期の「大津順吉」に見られる連帯とは異なる連帯への希求がうかがえる。つまり、文学の仕事をめぐる自家の人々と対立し、「家族」、「血縁」を排除し、それとは別の結びつきを求める志賀は大正六年の父との和解を契機に、血縁的結合の世界に近似するものとしての精神の連帯という境地に辿りついた。よって、初期から中期にかけて繰り返し問い直されている志賀テクストにおける「皆」・「吾々」・「私共」という複数形人称の問題系が、「焚火」において一つの到達した境地を示したと言えよう。

「皆」という人称は「焚火」にのみ見出されるものではなく、初期作品から後期作品に至るまで、興味深い例をいくつも見る事が出来る。各作品における「皆」・「吾々」・「私共」という複数形人称の用例数は下記の通りである。

表1 作品別における「皆」、「吾々」、「私共」の用例集計¹⁵

発表年月	作品名	皆	吾々	私共	その他の表記	
明治 43.4	網走まで		1			
明治 44.4	濁った頭	6	3	2	みんな	6
明治 45.2	母の死と新しい母	4	2			
大正元.9	大津順吉	13	4	5		
大正 2.10	范の犯罪	2		5		
大正 6.5	城の崎にて	1				
大正 6.9	赤西蠣太	5	1			
大正 6.10	和解	39	15	2		
大正 7.3	或る朝	1				
大正 8.1	十一月三日午後 の事	6				
大正 9.1	小僧の神様	2				
大正 9.4	焚火	14				
大正 10.1	暗夜行路	63	8	2	我々	1
昭和 2.10	邦子	2	1			
昭和 21.1	灰色の月	2				

このように、「皆」・「吾々」・「私共」という複数形人称は初期から後期に至るまで広範に用いられている。よって、志賀文学を問い直すには、「皆」・「吾々」・「私共」という複数形人称は、一つの有効な回路になりうると言えるだろう。以上の問題は今後さらに志賀の個々のテキストを再検討する作業につなげ、明らかにしていきたい。

¹⁵ 表1は教育技術研究所編(1987)『作家用語索引 志賀直哉』を基に作成した。

付記

本稿は、2012年5月、台北YMCAで開催された「台湾日本語文學會第282次例会」で口頭発表した内容に大幅に加筆し、訂正をおこなったものである。

テキスト

- (1973) 『志賀直哉全集』第1巻 岩波書店
(1973) 『志賀直哉全集』第2巻 岩波書店
(1973) 『志賀直哉全集』第3巻 岩波書店

参考文献

1. 猪熊理恵(1994)『「焚火」「光」と「闇」と物語』『文研論集』第24号
2. 芋生裕信(1997)「志賀直哉「焚火」論—「見え」と「遊び」の視点から—」『高知女子大学紀要』第45号
3. 上田穂積(2003)「コミュニケーションとしての〈物語〉—志賀直哉「焚火」再考—」『香川大学国文研究』第28号
4. 大津山国夫(1988)「焚火」『国文学解釈と鑑賞』第49巻12号
5. 教育技術研究所編(1987)『作家用語索引 志賀直哉』教育社
6. 小林幸夫(2004)『認知への想像力・志賀直哉論』双文社
7. 下岡友加(2011)「人間・自然・宇宙の連環—志賀直哉「焚火」の表現世界—」『県立広島大学人間文化学部国際文化紀要』第6号
8. 長沼光彦(1995)「「焚火」の空間」『都大論究』第32号
9. 古川裕佳(2002)「見出された「心境小説」—志賀直哉「焚火」—」『日本文学』第51巻6号

References

- Inokuma, R.(1994) "The Story of the" darkness "and" light ",Shiga Naoya "takibi". *Journal Nichibunken* No. 24
- Imo, H.(1997) "From the perspective of –“ play”and “appearance “,Shiga Naoya "takibi". *Kochijoshidaigaku* No. 45
- Ueda, H.(2003)"As a communication Stories, Shiga Naoya "takibi". *Kagawakokubungaku Kenkyu* No.28
- Otsuyama, K.(1988)" Shiga Naoya "takibi". *Kokubungaku Kaiyaku TO Kansyo* Volume 49 No. 12
- Kyoikukenkyuzyo(1987)Sakayogosakuin ShigaNaoya, *Kyoikusya*,Japan
- Kobayashi, S.(2004)Ninchihenozoryoku:Shiga Naoya, *Sobusya*,Japan
- Shimooka, Y.(2011) "The representation of the Shiga Naoya's "Takibi". *Ningenbunkagakubu Kokusaibunka Kiyo Prefectural University of Hiroshima* , No.6
- Naganuma, M.(1995)"Shiga Naoya "Takibi". *Todai Ronkyu* No.32
- Furukawa, Y(2002)" The Discovery of Impressionist Fiction--Reading Naoya Shiga's "Takibi". *Japanese Literature* Volume 51, No. 6

※2012年8月31日受理 2012年11月10日審査通過

編集委員會

召集人 曾秋桂

副召集人 許均瑞 林青樺

編集委員 鄭婷婷 蘇文郎 楊錦昌 王世和 林雪星 范淑文

陳淑娟 馬耀輝 劉長輝 陳文敏 內田康

堀越和男

執行編輯 廖育卿 落合由治

助理編集 劉于涵

台灣日本語文學報32
論文と教育研究報告の投稿に関する外部審査の結果、全投稿 27
本中、16 本が掲載された。今号の掲載率は 59.3%である。
台灣日本語文學會

台灣日本語文學報 32

出版者：台灣日本語文學會

理事長 曾秋桂

會 址：25137 台北縣淡水鎮英專路 151 號

淡江大學日本語文學系

傳 真：(+886) 02-2620-9915

網 站：http://www.geocities.jp/taiwan_nichigo/

出版日：2012 年 12 月 31 日

ISSN 1727-2262

JOURNAL OF JAPANESE LITERATURE & LANGUAGE IN TAIWAN 32

CONTENTS

Foreword

- Tseng, Chiu-kuei The 32nd publication foreword..... 1

Special contribution

- Komori Yoichi Woman hatred as Misogyny in "Norwegian Wood " of Haruki Murakami..... 3

Research Articles

- Tseng, Chiu-kuei A device of the memory reproduction in "1Q84": From a relationship between "Sanshiro" of Soseki as a Archetype..... 21
- Yeh, Ling The Violence in Haruki Murakami "Afterdark": A mirror as the key to reading and understanding..... 41
- Lin, Xue-xing Memories of China in the Works of Haruki Murakami :with a Focus on "A Slow Ship to China" and Listening to the Song of the Wind 67
- Kobayashi Yuki The Expat Tale in Wen Yourou's "Laifuku no Ie": Seen from character names and languages..... 93
- Huang, Ju-ping The Discourse on Haruki Murakami's "Landscape with Flatiron": A Discussion on the Correlation..... 117
- Shen, Mei-hsueh A Report on Magazine "Taiwanbungei": Mainly on Its Role in the Development of Taiwan Haiku..... 139
- Wang, Chia-lin The Research about "Takibi" by Shiga Naoya; Focus on the plural form "minna" 165
- Lin, Chin-hwa A Study of the Semantic Analysis of "surukoto ga aru".....185
- Ochiai Yuji A text structure of a short story work in Haruki Murakami: From the viewpoint of multi-genre characteristics with novel and essay..... 209
- Chen, Tzu-ching The Possibility of using TAE to Enhance the Development of Linguistic Expression in Advanced Japanese Conversation Class: A Perspective Based on Learners' Feedback 235
- Chen, Shu-yin The Family Values of the Indigenous Peoples in Taiwan During the Japanese Colonial Era: A Case Study of the Ethics Textbooks During the Shiaoowa Period 261
- Lee, Tsung-ho Self-determination of writing motivation in Japanese learners in Taiwan..... 287
- Lin, Chang-ho Survey on Employment Directions from Students of Japanese-Language Graduate Institutes in Taiwan..... 313
- Huang, Yu-han A Pragmatic Analysis of Japanese Synonymous Expressions "(no)darou(ka)": Including Acquisition Research on Taiwanese JFL 337
- Lai, Yu-chin The death remonstrance of Yoshida-Shouin: In comparison with the loyal Chinese official-Qu Yuan..... 363
- Lin, Ya-fen Shift of Written Language into Spoken language: A Study on the Sight Translation of Texts of Sightseeing Guidance..... 389
- Activities Report**
Abstract of reports in regular meetings..... 415

December 2012

JAPANESE LANGUAGE & LITERATURE ASSOCIATION OF TAIWAN